

## 2006 年度夏季現地研究会「東京の水環境の今昔と再生」報告

伊藤達也（金城学院大学）

2006 年夏の現地研究会は、8 月 5 日～6 日にかけて「東京の水環境の今昔と再生」をテーマに実施しました。また、6 日には「板橋郁夫先生傘寿祝賀論文集出版記念パーティ」を開催することができ、大変有意義な研究会となったことを報告させていただきます。以下、簡単に報告させていただきます。

### 8 月 5 日（土）両国～お台場

研究会初日の 5 日は、古くから水辺空間を都市の中に取り込んで発展してきた「両国」、今や東京の顔となっている新ウォーターフロントの「お台場」をメインに、その間を水上交通「隅田川クルーズ」で移動することによって、両者の対比を行いました。

参加者は約 20 名と、例年になく多く、メンバーは午後 1 時に両国駅前の「江戸東京博物館入口」に集合、そのあと、2 時間かけて博物館を見学し、江戸＝東京の歴史・文化の真髄を堪能したところです。その後、「隅田川クルーズ」乗船場に行く途中、「安田庭園」を通っていったのですが、当日は夕方から夕涼み祭りが開催されるとのことで、既にそれなりの人手で賑わっていました。浅草から両国にかけては古くからの水辺空間を代表するところなのですが、夏の強い日差しに妨げられ、なかなか博物館の外を満喫できる状況になかったのが残念でした。

午後 3 時 30 分に「隅田川クルーズ」に乗船し、約 1 時間の隅田川・東京湾クルーズを楽しみました。隅田川岸はかなりの高層ビルが立ち並び風景となっており、バブル期から続くウォーターフロント開発による都市景観の変貌が最も強く現れたところであると思われます。川風、潮風に吹かれながら気持ちよく過ごすことができたということもできるのですが、一方で、川水の色が茶色っぽく、なんとなくウォーターフロントの「ウォーター」の部分に課題が残されているように思えてなりませんでした。

船を下りてからのお台場散歩は集合時間・場所を決めての自由行動で、参加者は自らの関心で移動されたようです。しかし、こちらも夕方まで残る強い日差しによって、多くの参加者は午後ののどかな休憩をゆっくりとホテル内の喫茶店でとったのが実際と言えるでしょう。

自由時間が終わり、参加者は新橋へ移動、夜の懇親会へと向かった次第です。

8月6日(日)日本橋～皇居

2日目は午前10時に日本橋に集合し、江戸時代から現在にかけて、わが国の交通体系の中心である日本橋を見学しながら、お互いに情報交換を行いました。例えば、韓国のソウルでは町中にあった清溪川(チョンゲチョン)の上を走っていた道路を撤去し、都市河川のもつ意義を改めて全世界に向けて発信していますが、日本の東京に当てはめた場合、それは間違いなく日本橋周辺で、日本橋川の上を走る高速道路の撤去といった問題に関連してきます。都市の水辺空間を考えた場合、またその上で清溪川(チョンゲチョン)の事例を好意的に見るならば、私たちは日本橋についてもっと強い意識と行動を伴うべきなのかもしれません。もちろん、このことは日本橋に限らず、大阪市内の堀、名古屋市内の堀川等、全国の都市内河川にも当てはまることです。

その後、いったん、パーティの行われるKKRホテル東京へ行き、荷物を置いた後、改めて希望者はホテルの前にある皇居へ散歩に出かけました。時間が限られていたこともあり、ゆっくりとはいきませんでした。大都会の真ん中にこれほどのまとまった緑の空間があることに改めて驚かされるとともに、本当に暑い日ざしの中ではありながら、それぞれが楽しい時間を過ごすことができたことは間違いありません。皇居はお勧めです。

8月6日(日)出版記念パーティ

12時から「板橋郁夫先生傘寿祝賀論文集出版記念パーティ」が始まりました。参加者は25名ほど、2時間という限られた時間ではありましたが、板橋郁夫先生傘寿祝賀論文集『水資源・環境研究の現在』(成文堂)を無事、板橋先生にお渡しすることができ、出版に関わったものとして大変うれしかったことを覚えています。パーティでは出版にまつわる話、これまで板橋先生から指導を受けた時の話などなど、大変楽しい話が続き、お酒も入ったこともあり、出席者全員が楽しい時間を共有できたと思います。

『水資源・環境研究の現在 - 板橋郁夫先生傘寿記念 - 』は26本の論文を収録し、31人が執筆したために、総ページが628pと大変大部なものになっています(値段は9,000円)。しかし、これまで水資源・環境学会に関わってこられた方の多くが執筆に関わったことにより、内容は大変充実したものとなり、さらにある意味では、水資源・環境学会の記念刊行物の性格を持っているように思えてなりません。1983年に学会が設立されていますので、学会としてこうした成果を世に問うていく試みがさらに強く求められているのではないかと

と思いましたが。本書の評価を待ちながら、さらにこうした企画を積極的に立てていくことによって、学会がさらに力強く発展していくことを願うばかりです。

以上、大変簡単ですが、2006年度夏季研究会の報告とさせていただきます。